

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380797

研究課題名(和文) 心中による虐待死の未然防止に向けたチェックシートの開発

研究課題名(英文) A study of the concept of utilizing check sheets to prevent child Filicide-Suicide

研究代表者

石川 瞭子 (ISHIKAWA, Ryoko)

聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：50330634

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「心中による虐待死」未然防止のチェックシート開発を目的とした。まず、加害者が母親の9事例からその背景要因を検討し、次に、精神科医療機関・保健所・精神保健福祉センターを対象に質問紙調査を行い支援者側の認識を検討した。分析の結果、「心中」企図の背景に家族の「喪失体験」があり、それらは自殺未遂既往・衝動性・夫婦間トラブル等の「自己破壊感」に関連が深いことが示された。以上をふまえ、支援者が母親へ対応する際のチェックシートを、母親の地域生活を支えることを約束する、母親の「自己破壊感」に留意し「生活の語り」を聞き取る、母親の「成功体験」を掘り起こしエンパワメントする、の3ステップで構成した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to create a check sheet for the prevention of "Filicide-Suicide". We first implemented a qualitative analyzed of nine cases. Secondly, we implemented a questionnaire survey to caregivers at 866 institutions. Our results indicate that 9 families had suffered a loss affected the mental health of mothers. Additionally, the results suggest that the loss was related to feeling of self-destruction. It was assumed by the researchers that mothers wished their surviving children stay close by and the mothers developed a fear of separation from them. Therefore, our check sheet is constructed following 3 steps; (1) caregivers make a promise to stand by the parent at regional life; and (2) with noting "a feeling of a self-destruction for mothers", caregivers listen to "a narrative about their hard lives" with great interest; and (3) caregivers find "success find experiences" in the life that mothers have lived with their children in order to encourage them to keep on living.

研究分野：社会福祉学

キーワード：心中による虐待死 喪失体験 自己破壊感 生活の語り 成功体験

(2)事例研究の結果、危機発生要因に家族境界の曖昧化が見出された。下記に具体例を示す。

分析対象：事例3の概要

母子3人(実母・2歳児・5歳児)が、民家の敷地内に駐車した車中で一酸化炭素中毒によって死亡しているのが発見された。
前危機段階 危機発生段階

表2. 事例3における前危機段階 危機発生

要因	要因の内容
aA: 累積	第1子・第2子の発達上の問題の顕在化、第1子の保育園から幼稚園への転園への不安、パートナーの失踪・自殺、祖父の入院。 家族境界の曖昧化③
bB: 既存資源 新規資源	既存資源: パートナー失踪時に祖父の支援を受ける。福祉事務所・保育所・療育センターの見守り。 新規資源: 児童相談所の一時保護。新たな支援員と支援関係形成。新しい職場への勤務と生活再建。
cC: x+aA+bB の認知	2度目のパートナーの喪失と祖父の入院によって、自責感と喪失感が強化され、認知の閉塞状況に陥ったと推察される。
対処	支援員に体調不良を始めとする不安感を相談するが、具体的な問題解決への行動は回避する。
不適応: xX	祖父の敷地内に車を留め、心中発生。

後危機段階

表3. 事例3における後危機段階

要因	要因の内容
a: ストレス源	父親は殆ど働かず借金のある状況で長女を出産した。次女出産2週間後に失踪し所在不明となる。 家族境界の曖昧化①
b: 既存資源	父方の実家を通して離婚し、児童手当、児童扶養手当、ひとり親家庭の手続きをとり、母方祖母宅に同居した。
c: aの認知	離婚によって経済的な支援を確保し、住居については母方祖父宅に身をよせ、働きながら母子3人の生活を維持しようと認知した。
x: 危機	職場の男性(離婚した元妻との間の3人の子どもに養育費を払っている)と恋愛関係になり結婚を意図した。元夫の姓を改姓し、祖父宅をでて県営住宅に母子3人で暮らし始めた。 家族境界の曖昧化②

家族境界の曖昧化による危機

生活基盤が脆弱な家族において、家族の社会的枠組みの変化及び生活形態の変化は、新たな家族境界の曖昧さをもたらし、家族成員の不安を高める結果となる。さらには、家族機能の脆弱性を強化し、家族危機となることが見出された。

(3)事例研究の結果、9事例の家族危機形成プロセスに共通して危機発生段階に「喪失体験」が見出された。

危機発生段階において、A.危機の直接的な要因、B.危機発生の状況から喪失体験が明らかになった。

事例1: A.母親が電話相談で「何もかも終わりにしたい」「話を聞いてほしい」と相談し希死念慮を示した。B.母親は再び精神科病院で入院治療を受けることとなった。

事例2: A.経済的に行きづまり、母親の収入では生活できなくなった。B.児童扶養手当を受給するため形式的離婚に踏み切った。

事例3: A.恋愛関係になった男性との結婚を

意識し、元夫の姓から旧姓に戻し祖父宅を出た。B.母子3人はそれまで馴染んでいた姓を捨て、県営住宅で暮らし始めた。

事例4: A.年末に保育所が休みのため不安が高まり、「子どもを殺してしまいそう。預かってほしい」と訴えた。B.祖母宅以外に男児の預け先がなく、距離をおいていた祖母を頼らざるをえなくなった。

事例5: A.父親の通勤時間を短縮するため、職場に近い地域に転居した。B.父親は昇格等でますます多忙になり、転居先では乳幼児健診も終了し家庭保育となった。

事例6: A.男児の妊娠中から同居する祖母との間で、金銭トラブルが発生した。B.祖母と別居するが、名義問題でアパートが借りられなくなった。

事例7: A.父親は元の職場に復職し、自宅を購入した。B.家族は母方実家の地域から離れた都市部のG区に転居した。

事例8: A.母親の支援者である男性と長女が親密になった。B.母親は「死のう」と思い包丁を持ち出し110番通報した。

事例9: A.職場が閉鎖し、新しい就職先も住居も定まらない状況で、退去期限を迎えた。B.住む場所を失い、所持金と自家用車を頼りに、3人で車上生活となった。

9事例の家族危機に共通し、母親が「喪失体験」によって失った「自己」が明らかになった。

事例1: 入院からの家庭復帰の見込みがなく、夫の妻である自己と母親として生きる自己を喪失した

事例2: 離婚によって婚姻に基づく家族のなかで社会的に生きる自己を喪失した。

事例3: 祖父の支えを失い、祖父に支えられて生きる娘としての自己を喪失した。

事例4: 祖母に脅かされない自我を守る者と、母親として生きる自己を喪失した。

事例5: 夫と共に男児を養育する安心感と、夫に支えられる妻として生きる自己を喪失した。

事例6: 娘として祖母に守られる自己と、母親として安定して生きる自己を喪失した。

事例7: 実家の支援を失い、実家に守られて地域で生きる自己を喪失した。

事例8: 家事機能と情緒的な支えを失うだけでなく、女性としての自己を喪失した。

事例9: 約8年かけて祖母と男児の3人で築いた生活と、地域生活者としての自己を喪失した。

(4)質問紙調査の結果、支援者が「心中による虐待死の背景要因に『喪失体験』があると認識している」ことが示唆された。

支援者が母親の状態像を把握する際の「心中リスク感度」が高いほど、精神保健上の問題をもつ母親が抱える生活上の問題への認識が高まることが示唆された。特に、「心中リスク感度」群分けの高群-中群間において、「喪失体験」が34%、「育児不安や育児負担感」

が28%、「夫婦間のトラブルなどの家庭不和」が23%と、顕著な差があることが示された。

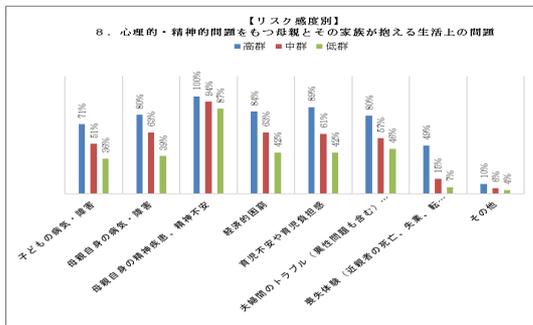


図3. リスク感度別：
精神保健上の問題をもつ母親とその家族が抱える生活上の問題

精神保健上の問題をもつ母親に「心中による虐待死」のおそれを感じた際の家族の生活上の問題として、「喪失体験」には、第1に群間差の特徴に高群 > 中群 > 低群の順序性が示され、第2に群間推移も高群 > 中群 > 低群の順序性が示された。これらの結果から、「喪失体験」が「心中リスク感度」に関連していることが示唆された。

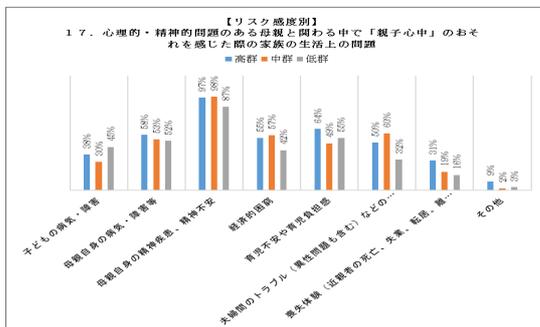


図4. リスク感度別：
精神保健上の問題をもつ母親に関わるなかで
「心中による虐待死」のおそれを感じた際の家族が抱える生活上の問題

支援者が精神保健上の問題をもつ母親全般の生活上の問題を捉えた場合と、「心中による虐待死」のおそれを感じた際の生活上の問題を捉えた場合を検討すると、「喪失体験」は「心中のリスク感度」の高さに相応して支援者に認識されることが示された。よって、支援者が「心中による虐待死の背景に『喪失体験』がある」と認識していることが示唆された。

(5) 質問紙調査の結果、「喪失体験」は「家族機能の自己破壊感」に関連があることが示唆された。

「心理的・精神的問題をもつ母親の状態」「心理的・精神的問題をもつ母親とその家族の抱える生活上の問題」「心理的・精神的問題をもつ母親の危機」「親子心中のおそれを感じた家族の生活上の問題」の項目について、相関行列の回転ありによる主成分分析を行い、第1主成分を検討すると、「喪失体験」に関連が深い項目が9項目示された。それらは「家族機能の自己破壊感」と総称できた。

「家族機能の自己破壊感」とは、自殺未遂既往、母親の病気・障害、衝動性、精神疾患、DVを受けている、感情の起伏が激しい、自殺のおそれ、怒りのコントロール不全、夫婦間のトラブルといった問題である。

「心中による虐待死」の背景要因として考えられる「喪失体験」に関連が深い「家族機能の自己破壊感」という問題が、支援者側に「自殺のおそれ」として認識されやすい状況が示唆された。

(6) 事例研究と質問紙調査の結果を統合し、「心中による虐待死」未然防止に向けたチェックシートを考案した。本研究の研究成果のまとめとして、母親を支える際の「3つのステップ」を提案する。

ステップ1では、支援者は「母親のそばにいつづけ、母親が地域で子どもと一緒に暮らせるよう支え見守る」と約束する。精神保健上の問題をもち、子どもに危害を加える虐待がない場合、一見問題はないと認識されがちだが、母親は子どもとの分離を最もおそれるため、敢えて自身の困難を伝えないものと考えられる。支援者は母親の安全感を脅かさないうよう、慎重に援助関係を形成する。

ステップ2では、母親の「自己破壊行動」を未然に防止するために、母親の「生活の語り」を傾聴するなかで、「自己破壊行動」に関連する諸問題を外在化する。具体的には、(5)で示した喪失体験、自殺未遂既往、母親の病気・障害、衝動性、精神疾患、DVを受けている、感情の起伏が激しい、自殺のおそれ、怒りのコントロール不全、夫婦間のトラブルといった問題に留意し、母親の辛さを十分に聞き取りねぎらう。これの諸問題を外在化することで、母親が新しい見方を得られるよう支援する。また、「生活の語り」のなかで自己破壊の危機を察知した際は、速やかに専門家に相談し、適切な支援を提供できる体制を整備する。

ステップ3では、母親が自分の力を信じ再び歩きだせるよう、「成功体験」を掘り起こし、勇気づける。母親の忘れかけた「成功体験」、すなわち、嬉しかったこと・幸福を感じたこと、頑張ったことなどを聞き取り、母親が「新しい物語」を語ることを励ます。妊娠し出産したこと・母親になり家族をもてたこと、子どもが成長する姿をみることを「成功体験」に位置づけ、母親から潜在的な力を引き出す。母親が子どもとの関係に依存しなくてもすむよう、分化を促し、母親をエンパワメントし、母子の地域生活を支える。

本チェックシートは、実家の祖父母・子どもの父親等の子育てに協力する際に重要な位置にある成員が司る家族機能が適切に機能しないなかで、精神保健上の問題をもちながら子育てをする母親を、適切に支えるためのツールである。支援者が支援を行う際に必要な心構えや姿勢を見直すために、支援者間で共有する留意点を提示したものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

西岡弥生、子どもの人権からみる家族危機の検討 - 心中による虐待死事例における前危機段階の分析から -、聖隷社会福祉研究、査読有、8号、2015、21-32

〔学会発表〕(計3件)

西岡弥生・石川瞭子、「心中による虐待死」の未然防止策-オルタナティブな語りを支援するチェックシートの考案、聖隷クリストファー大学社会福祉学会・プレセッション、2017.3.18、聖隷クリストファー大学
西岡弥生、子ども虐待死事例もあける家族危機形成プロセスの検討 心中による虐待死事例9事例から見出された共通性、社会福祉学会、2015.9.19、久留米大学
西岡弥生、家族危機形成のプロセス - 心中による虐待死事例の分析から -、日本家族学会、2015.7.19、山形大学

〔図書〕(計1件)

石川瞭子編著、青弓社、サイレント・マザー-愛の貧困に生きて-、西岡弥生、見過ごされた虐待死-語らない母の手が犯した「心中による虐待死」、印刷中

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

石川 瞭子 (ISHIKAWA, Ryoko)
聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：50330634

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

西岡 弥生 (NISHIOKA, Yayoi)
聖隷クリストファー大学大学院・社会福祉学
研究科・博士後期課程